

鐵覽

電

軍務局

軍令部

~~軍令部~~

海軍

大正三年一月三日 午後六時十五分 海軍局 著

受信者 海軍大臣

電報譯

発信者 修験長官

米路汽船搜索ノ多大派遣セル日月夕
 暮朝鮮南岸ノ一帯ヲ巡航二十四日夕
 刺敵艦本行動中何等ノ異状ヲ認め
 持^{之新島島燈台}及巨文島漢民ノ研訊中
 敵艦^破又漂流物ノ有無ヲ取調メ
 又^{名山}何等ノ手掛^{ナカシ}音報^ニ接セ
 又^{最上}浦塩航路^{ノ北}上^陸島^味

第一班

刺

梅

陸

島

0297

3. 1. 27

近三幸の天候不良一為一時竹田灣ニ隣泊
 如くも本日午後更ニ出勤 險悪ナル天候ヲ
 犯シ入方捜索シヨリ目下新何事ナ
 異状ヲ認めズ 内浦塩ヨリ南下セル汽船
 三艘ヲ目撃 問如ク漂流物ヲ認めサレトモ
 右取跡不報告云

(印)

花時節

0298

電 報 着 信 紙

局 着		局 發				名氏所居人信受				
取 扱 者	受 信	付 午 後 前	付 午 後 前	第	報 局	<p style="font-size: 2em;">カ ハ ニ シ ル コ ト ニ シ テ カ ル コ ト</p>				
		時 分	時 分	號	報					
		字	日	月	年	報	<p style="font-size: 2em;">カ ハ ニ シ ル コ ト</p>			
フ コ ビ ト キ コ フ ニ ト	ヌ コ ヒ ト メ ト ク ニ ト イ ニ ト	ヌ ケ コ ウ ナ ク コ ウ コ ウ コ ウ ニ ト	ヌ カ コ ニ フ ニ ク ニ ク ニ ク ニ ク	ヌ ホ コ ホ 、 テ ウ セ ニ ク ニ ク	ヌ ツ ソ ウ キ セ ン ソ ウ ウ 、 サ	定 指	<p style="font-size: 2em;">カ ハ ニ シ ル コ ト</p>			
						事 記			<p style="font-size: 2em;">カ ハ ニ シ ル コ ト</p>	
						番着 號信	數紙	名氏所居人信發		
						第 の	五	號		
						印附日信着				

0299

電 報 着 信 紙

局 着		局 發				名氏所居人信受						
取扱者	受信	付受 午後 後前	時 分	字	付受 午後 後前	時 分	日	第 號	局	報	名氏所居人信受	
											(三)	
定 指										番着 號信	數紙	名氏所居人信受
事 記										第	五	號
コ										印附日信着		
コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ		

0300

電 報 着 信 紙

局 着		局 發					名 氏 所 居 人 信 受			
取 扱 者	受 信	付 受 午 後 前	時 分	字	付 受 午 後 前	時 分	日	第 號	局 報	報
										(三)
										定 指
										番 着 號 信
										數 紙
										名 氏 所 居 人 信 發
										第 五 號
										事 記
										印 附 日 信 着

0301

電 報 着 信 紙

局 着		局 發					名氏所居人信受						
取扱者	受信	付受 午後 後前	時 分	字	付受 午後 後前	時 分	月 日	第 號	局	報	(12)		
													定 指
											事 記		
											番着 號信	數紙	名氏所居人信受
											第	五	
											號	六	
											印附日信着		

0302

供覽

聖

速難

好

子

軍

印

印

大正三年一月二十日

散記 佐々木 龍一 少将 長及

五島 隆夫 少将 大佐

高島 忠 少将 大佐

島上ハ其後天候陰悪ノ物ナリ

本州中ノ遠ニ何ノ手懸ク

又州中ノ遠ニ何ノ手懸ク

又州中ノ遠ニ何ノ手懸ク

又州中ノ遠ニ何ノ手懸ク

又州中ノ遠ニ何ノ手懸ク

又州中ノ遠ニ何ノ手懸ク

其

送

(花)

海

軍

軍

軍務局接受

0303

電 報 着 信 紙

局 着		局 發				名氏所居人信受	
取扱者	受信	付午後	受午後	月	第	局	報
		後前	後前	日	三		
		時	時	八	〇		
		分	分	八	〇		
		字	分	日	號		
定 指							番着
ン 4 キ カ イ キ ヲ コ モ ワ カ り コ ミ ヲ カ ハ ウ イ ニ リ ツ り ニ リ ハ ニ ケ ハ ケ ナ イ オ ハ エ ス ワ ン ハ ン ク ニ ニ ヒ ロ ノ ン ア ソ へ マ ナ ヲ ヲ ガ ガ ヤ フ ク ノ タ ニ ウ . ム キ ノ ゴ イ 4 ノ ド ゼ ン ナ ヨ タ コ ク テ . ナ キ リ メ テ リ へ ガ ウ . ニ ニ ヒ 4							數紙
							名氏所居人信發
							第 二 號
事 記							番着
印附日信着							番着

0304

電 報 着 信 紙

局 着		局 發					名氏所居人信受				
取扱者	受信	付受 午後 後前	時 分	字	付受 午後 後前	時 分	月 日	第 號	局 報		
										事 記	
ン	ン	イ	ホ	ウ	グ	ン	ケ	イ	セ	ラ	オ
ニ	シ	、	ユ	ニ	ン	ガ	イ	セ	ラ	オ	ク
テ	テ	ノ	ホ	セ	ウ	ツ	セ	ラ	オ	ク	ド
ホ	ハ	コ	、	ツ	セ	リ	ト	ノ	シ	ニ	ハ
ウ	イ	ド	ヨ	ビ	ト	ノ	シ	ニ	ハ	ハ	ク
コ	イ	、	ビ	ト	ノ	シ	ニ	ハ	ハ	ク	ド
ク	シ	、	ト	ノ	シ	ニ	ハ	ハ	ハ	ク	ド
ス	、	、	、	、	、	、	、	、	、	、	、
メ	、	、	、	、	、	、	、	、	、	、	、

0305 0305

供覽

陸

軍務局

軍令部

大正三年一月

月二十八日 午後八時

五時五十九分

佐世保局 東京局 著

海軍

軍務局接受

受信者海軍大臣

海軍大臣 報譯

失踪汽船捜索ノ為ノ朝鮮東岸ニ汎遣セシ最上ハ天候ノ
 障害及燃料不足ノ為ノ鬱陵島北方海上ヲ捜索スル能ハス
 コレヲ引返ヘシタル次第ナリ此ノ後尚捜索ヲ継続セシカ為ノニハ
 目下ノ天候ニテハ大艦ヲ汎遣スルノ要アルヘキモ最早多ク
 時日ヲ経過セル今日午懸クヲ得ル見込ナカルヘキニ付右
 ニテ捜索方ヲ打切リタル次第ナリ念ノ為メ報告ス

第一班

0306

電 報 着 信 紙

局 着		局 發				名氏所居人信受								
取扱者	受信	付午 後前	付午 後前	第 九 號	月 三 日	報 局 報								
		1 時 分	1 時 分	九	三	報 局 報								
定 指						<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <th style="writing-mode: vertical-rl;">番着 號信</th> <th style="writing-mode: vertical-rl;">數紙</th> <th style="writing-mode: vertical-rl;">名氏所居人信發</th> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">第 九 號</td> <td style="text-align: center;">三 三 號</td> <td style="text-align: center;">報 局 報</td> </tr> </table> </div> <div style="text-align: center;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <th style="writing-mode: vertical-rl;">印附日信着</th> </tr> <tr> <td> </td> </tr> </table> </div> </div>	番着 號信	數紙	名氏所居人信發	第 九 號	三 三 號	報 局 報	印附日信着	
番着 號信	數紙	名氏所居人信發												
第 九 號	三 三 號	報 局 報												
印附日信着														
事 記														
カ	ル	↑	レ	レ	白		モ	カ	ノ	エ				
ハ	ア	セ	ウ	ウ	カ		イ	ノ	ウ	ウ				
エ	タ	ト	フ	フ	ハ		ニ	ノ	ウ	ソ				
タ	ワ	ウ	ソ	ソ	ハ		ニ	ノ	ウ	ウ				
ル	ス	ウ	ノ	ノ	ノ	ハ	テ	キ	セ					
エ	エ	ソ	ホ	ノ	ウ	ウ	ウ	セ	ウ					
タ	エ	ウ	ウ	ウ	ヒ	コ	ウ	ウ	ウ					
イ	ヒ	ウ	ウ	ウ	ウ	子	ウ	ウ	ウ					
ナ	キ	ス	カ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ					

0307

電 報 着 信 紙

局 着		局 發				名氏所居人信受		
取扱者 受信	付受 午後 後前	付受 午後 後前	第	月	日	報	局	
	時 分							時 分
定 指								
ス リ 子 ニ ノ ツ ヲ ヲ コ						番着 號信	數紙	
						第		名氏所居人信發
						記		號
						事		印附日信着

0309

覽

電

軍務局

七五

大正三年一月廿九日

佐世保鎮守府司令長官 島村速雄

海軍大臣 男爵 齋藤 實殿

失踪汽船捜索ニ関スル件

去二十日海軍次官電照ニ依リ失踪汽船捜索ノ多

軍艦最上驅逐艦三日月夕暮ヲ派遣スル儀取着

右派遣艦ヨリ別紙寫ノ通報提出ス條別紙

訓令ニ相添

右進達ス

(別紙表格添)

(終)

海

軍

3. 2. 3

0310



佐鎮第七五號

大正三年一月廿二日

佐鎮守府司令官島村速雄

佐吉保水雷隊司令官千坂智次郎殿

汽船捜索ノ件

一、汽船千山丸ハ本月二日大連發八日浦塩着、

等ナルモ未ダ到着セズ汽船歐羅巴丸ハ本月

六日午後四時石炭満船熱田ニ向ケ旅順發

其後行衛不明ナリト云ク

二、貴官ハ第八駆逐隊ノ二艦ヲヒテ速ニ生動朝鮮

南岸巨文島附近ヨリ對馬海峡ニ至ル間右

汽船航路附近ヲ捜索セシムヘシ

0311

三對馬海峽ヨリ對馬島、北方百五十里附近
ニ至ル海面ハ別ニ軍艦最上ヲシテ搜索セシム
右訓令ス

(終)



佐鎮第七五辨ノニ

大正三年一月二十二日

佐保鎮守府司令長官島村速雄

佐保鎮守府艦隊司令官山縣文藏殿

汽船搜索ノ件

一 汽船キ山丸ハ本月二日大連發八日浦塩着、廿日午
ルモ未夕到着セス汽船歐四維巴丸ハ本月六日午
後四時石炭満船勢田ニ向ケ旅順發其後行
衛不明ナリ又浦塩ヨリ大連ニ入港セシ船舶ニシ
テ鬱陵島、北百三十澤、辺ニテカレリキシケレ、浮
流セルラ兎タルモノアリシト云フ

二 貴官ハ最上ヲシテ速ニ出動對馬海峡ヨリ鬱

陵島、北方百五十里、辺ヨテ右汽船ノ航路附

近ヲ搜索セシムヘシ

三朝鮮南岸巨文島附近ヨリ對馬海峡ニ至ル間

ノ海面ハ別ニ第八駆逐隊ノ二艦ヲシテ搜索セシム

右訓令ス

(終)

寫

皇極書第一〇号之三

大正三年一月廿八日 於伏世原

最上経長三村錦三郎

伏世原鎮守府艦隊司令官 山縣文彦 殿

軍艦最上行動報告

大正三年一月廿二日午後三時伏世原中七五号ニ、訓令ヲ受領シ

直ニ炭水軍需品ヲ搭載及航海諸準備ニ着手セリ

二十三日午前八時三十分準備完成伏世原ヲ発シ最ニ提告シ豫

定ニ所ヲ行動ス

對馬水道ヲ巡視見張リ嚴シニ漸次北上セリ

二十四日午前九時嶺陵島ノ南西ヲ西早湊ノ奥ニ於テ英國汽船

海

軍

0315

船名カキ号ノ浦塩ヲ南下セシ會ニ途中遭難船漂流物ヲ
 認メサリシヤ同ト何物ヲモ認メナリシ旨ノ函答ヲ得タリ推定シ
 今船ニ二十三日正午頃北緯四十度附近ヲ通過セシモノト認ム
 夫ノ本艦ニ辯陵島ニ向ヒ今島ノ南西岸ニ接シテ航ニ郵便電信局
 ノ所在地ニ道洞沖ニ至リシカ浪高ク接近ス能ハス則チ風下側ノ陸岸
 ニ近接スルニ到底短艇ヲ出ス能ハサルニ至ラス陰崖絶壁陸ニ上ルカ
 ラサルヲ恐メ止ムヲ得ス中止ニテ東北ノ沿岸ヲ注視シツク周航ニ再
 豫定ノ航路ニ入りテ北上セトセリ然レニ此時ヲ天候急変ニ南西ノ
 風益強猛トナリ晴雨計ノ降下急ニシテ低氣圧ハ元山方面ヲ通過ス
 ルノ模様ナリシヲ避クルノ目的ヲ以テ西南西ニ針路ヲ変シ朝解
 陸岸ニ向フ午後十二時新秋岬ノ燈火ヲ認メ則チ竹辺灣ニ避難

スルニ決ヤリ

廿五日前三時三十分頃以湾に依泊ス此時より風向は第ニ西ニ衰ニ天明
后北西トナリ風力依然トシテ五乃至六

廿六日風稍衰リタルヲ以テ午后三時出港豫是ノ航路ヲ北上セリ然レニ距

岸五哩ニ及フヤ北西風ハ依然トシテ強吹ニ波浪高大ニシテ逆航頗ル

困難ヲ感シ進ムニ從ツテ益々其度ヲ増スヨリ即チ針路ヲ變ニ

海岸ニ沿ヒシモ當夜此状以テ持續スルニ於テハ所詮搜索ノ目的ヲ

達シ得ん望ナリ從テ燃料ヲ冗費ニ遂ニ不足ヲ生スルニ至ルハキヲ

以テ此進ヲ断念シ午後五時針路ヲ反転シテ海岸ニ近接航行ニ正子

長鬢岬^の達ヤリ

廿七日前風浪尚大ナルニヨリ沿岸ノ航海ヲ續ケ天明ヲ以テ釜山ニ

海軍

0317

避泊スルニ決シ午前七時釜山着淡水ヲ補充シ午後六時釜山在也
係向ノ

井八日午前九時返港セリ

此行動中不幸ニシテ天候ノ迫害ヲ受ケ訓令ノ全部ヲ履行スル能ハ
ス又何等ノ手掛リヲモ得ん能ハザリシハ頗ル遺憾ニ堪サレトコロナリ
竹辺湾ニテ竹辺湾ノ南ニ重ナル蔚珍ヨリ来艦セシ憲兵分隊長ノ
始ルニコレハ慶尚北道沿岸漂流物ノ着岸セシラ聞カス又七日ノ
荒天ニ三十年未だ経験セザル処ニシテ風向ノ偏西ナリシニ拘ララス竹辺湾
附近ニ丈夫ノ高浪沿岸ヲ襲ヒ韓人家屋ノ流サレ又ハ潮壞セシメ多
クナリト又竹島ノ岩礁州立ニ到底攀登スルカラス唯一ヶ処ノ僅カニ
三四間ノ攀登シ得ん場所アル之レ夏季ニ於テ静穏自レノ漸ク

0318

目的ヲ達スルニ過キテ冬季ニ於テハ上陸ハ不可能ナリト云フ

尚鬱陵島方面ノ状況英船ノ参并ニ現時ノ天候等ノ綜合考察

スルトキハ此方面ニ於テ搜索ノ目的ヲ達セシメ煩ル困難ニシテ殊ニ

本艦ノ如キ小型艦ニ在ラハ其効果一層少キモノト信ス

加報告ス

(5)

0319

寫

八驅第五號

大正三年一月廿四日於佐世保

三日月驅逐艦長北村栄虎

佐世保鎮守府司令長官島村速雄殿

失跡汽船搜索報告

失跡汽船搜索、余々凌々大正三年一月二十一日午

後六時夕暮ヲ率ヒ編隊生港對馬西岸ヲ

北上シ翌二十三日午前八時鳴島、南七十五度

西十二哩ノ地ニテ解列別紙行動番、通リ單

獨搜索ヲ行ヒ午後三時三十分三島港ニ入泊

二十四日午前六時半編隊生港以外ニ於テ

0320

五 瀝間隔ノ搜索列ラ屢張レ古志岐ニ向針
 午後五時四十分佐世保ニ般港
 一 夕暮ヲシテ所里島燈其星下ニ進出信務
 ヲ以テ失跡汽船ニ就キ見聞セル所ナキヤラ
 聞カレシモノモ何等得ル所ナシ
 二 三島入泊後多数澳船ニ就キ難破汽船
 漂流物等異状ノ有無ヲ簡セシモ更ニ
 異変ヲ認メザル旨ノ答ヲ得タリ
 三 本行動中天气晴朗屢望自在ニシテ視
 界亦廣ク常ニ海面瀕岸等ニ對シ十分
 ノ注意搜索ヲ行ヒシモ何等手掛ヲ得ス

0321

右報告ス

行動爲直葉添付

終

海軍

0322

Wassertonne 294 ton

本船
明治三十三年製

軍務局

社
覽

西
島
船
務

重

佐
鎮
官

八
四
號
ノ
二

大正三年一月三十日

佐世保鎮守府參謀長中島市次
海軍次官財部彪殿

佐世保

汽船對馬丸救助關不件

一月廿七日午前八時三十分對馬運輸株式
會社ヨリ電報ヲ以テ社船對馬丸肥前三
重沖ニ墜礁船底破損浸水不待救助
ヲ乞フ旨出願セシニ依リ當港務部所
屬猿橋丸ヲシテ之ガ救助ニ從事セシメラル

0323

候 欠 右 對 馬 丸 別 紙 港 務 部 長 報 告 爲
 ノ 如 ヲ 猿 橋 丸 到 着 前 已 沈 没 シ 人 命
 三 異 狀 無 ヲ 引 揚 三 架 又 處 置 ヲ ナシタ
 三 救 助 ノ 必 要 無 キ ヲ 猿 橋 丸 八 井 八 日
 午 前 歸 港 致 候
 右 爲 念 報 告 不

(別紙汽船對馬丸救難作業報告添)

(終)

0324

寫

佐港弁三二ノ一

大正五年一月二十日

北陸海軍陸程部長 河野長重

佐世保鎮守府 司令官 増村 進 様

汽船對馬丸 救難作業報告

一月廿七日午前十時五十分迄 刻令 接

對馬汽船株式會社 汽船對馬丸 長崎縣三重沖に坐礁ニ付

救難船 徳橋丸 派遣之に力救助に從事セラル

救難船 徳橋丸 海軍中佐ニ命じ 徳橋丸ヲ指揮セラルト今時ニ全船ニ注意

点火ヲ有シ一面海兵團長ニ電話シ 救難船 派遣部署に臨時乗員

急遽ニ乗船ヲ請求シ 尚救難作業ノ材料搭載ニ着手ニ午後一時三十分

之ヲ完了シ 今三十分遭難地ニ向テ急行セリ

0325

該遭難地、航況、九記原田指揮官報告如左

原田指揮官報告

依序廿七日午後一時三十分出港、五時三重崎に着、對馬丸遭難、状況ヲ
探スルニ、本船、三重崎西南端、暗礁ニ擱坐、沈没シ、僅ニ煙突ノ上部ヲ露ス
ルニシテ、而其附近ニ一人、船員ヲ認メ、依テ船員ヲ搜索シ、状況ヲ確メ、タ
ス。三重浦港ニ向テ途中、偶々、本社船天陽丸ノ来ルニ會シ、船長、下船員、本港ニ
避難セシメ、爾キ午後五時、本港ニ投錨、九ノ電報ヲ發ス
「三重浦港ニ着、對馬丸、三重崎鼻ニ沈没シ、干潮ニ煙突ノ上部ノミヲ露ハセリ
船員其附近ニ居テ、今夜此地ニ破泊シ、船長ヲ捜シ、状況ヲ確メ、本港ニ
午後六時三十分上陸、對馬丸船長、陰山憲三郎ニ會見シ、本船、本朝午前〇時
三十分頃、坐礁、乗員四名、船員三名、全部上陸シ、異状ナク、又搭載セ、貨物
一名、陸揚セ、船体、坐礁、當時、前部ニ擱坐、充分引卸、見込、可、然、レ、
鎮守府ニ出願、シ、其後、風波、多シ、離礁、逆シ、沈没セ、故、容易、引揚、ノ

0326

見込ナリ長崎松尾造船所ニ引揚方全部依頼セシ故目下御救助ヲ要ス
 千七百七十七年閏七月五日辰時長崎松尾造船所ニ全部依頼セシ以テ本船
 對馬丸引揚船長ヨリ長崎松尾造船所ニ全部依頼セシ以テ本船
 救助ヲ要セザルニシテ明朝出港取港ス
 二十八年七月廿七日出港今午時二十五分取着
 右報告ス

(一)

0327

連院好

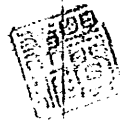
大臣官房

アト多ク

大正三年二月九日

軍務局長

電案



藤田

大正三年二月九日

軍務局長

植徳軍務局長官

供覽

電



二奉マストスリーナー吉岡丸昨年十月東京
湾ヲ敷シイタマエ島ヲ経テカシマ島ニ向ヒ十三
月二十八日カシマ西三十哩ニ於テ紀洋丸ニ遭ヒ
先由カモ一月下旬帰着ノ事定ナルニ今ニ消

花崎

0328

海軍

息^{高4艘ヲシテ}兼~~兼~~船^{ヲシテ}南^{ヲシテ}硫^{ヲシテ}黄^{ヲシテ}島^{ヲシテ}往^{ヲシテ}後^{ヲシテ}、^{ヲシテ}金^{ヲシテ}に^{ヲシテ}於^{ヲシテ}て^{ヲシテ}同^{ヲシテ}航^{ヲシテ}す

ニ^{ヲシテ}半^{ヲシテ}相^{ヲシテ}為^{ヲシテ}漁^{ヲシテ}意^{ヲシテ}セ^{ヲシテ}ル^{ヲシテ}ニ^{ヲシテ}シ^{ヲシテ}メ^{ヲシテ}セ^{ヲシテ}タ^{ヲシテ}リ

花島

0329

軍務局

元東京航海学校校長
ガンス島探險隊合員

手島徳五郎

吉岡丸

神田區表袋町二十五番地

系船

望原列島ノ内中ノ島 (ガンス島名)

下磯試堀特許代名者

平尾幸太郎

一 捜索 観目的物

吉岡丸 百七十一噸 航船 船長 白井 義 松

一 出航 航路 航程

大正二年二月十五日東京湾出航 全十九日

大島より見し片より小島風雨午後二時止む

折ラレシ全十九日朝小島望原列島ヨリ来

官房第三四二號

0331 0330

捜索系艇

小笠原列島内中ノ島(ガレビス島)

燐燧試堀特許代名者

平尾幸太郎

一 捜索系艇目的物

吉岡丸 百七十一噸 航艇 船長 白井嘉松

一 出航航路航程

大正二年五月十五日東京湾出航 全十九日八

六より見し片手、小笠原列島内中ノ島に於て二時刻

折ラレシ全十九日朝小笠原列島に到

官房第三〇二號

0331 0330

方ニ見勢十回ノ回轉航路ヲ可ク廿四ノ午後
五時又由ノ入港也 夫ヨリ航具佐理及カ
コレノ事ニ関スル無潤ヲオシタリ

一 小笠原父島出航 三月三日

浮遊カニシス島探險及燐礦採取

一 帰航浮遊 大正二年五月下旬

一 純洋丸ノ解送 別紙字ニ由リ

地獄カニシス島ヲ西南ニ距ル三十哩

東経 百五十四分 六分

北緯 三十分 四分

拾行 (九吉商店印刷)

0332

一ガニビシ入島所在及島種決定

東経 百五十五分二分

北緯 三十分

珊瑚層 無人島

一糸紅丸

船長白井舜 松本代理清水
舞太郎等 十九名

一糧食

本年三月中旬迄ノ決定

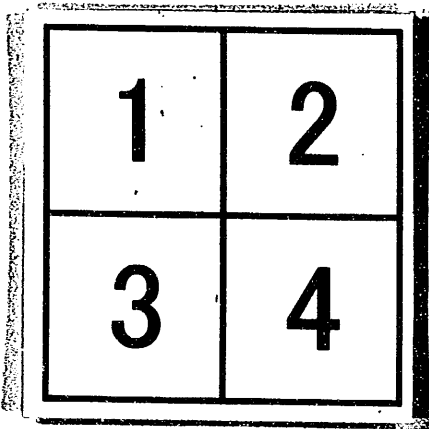
一吉岡丸出航ノ目的

挽回肥料ノ輸入ヲセシムルノ
昨正二年
迄ニ於テ七千萬方田ノ多額者トシテ之ヲ只

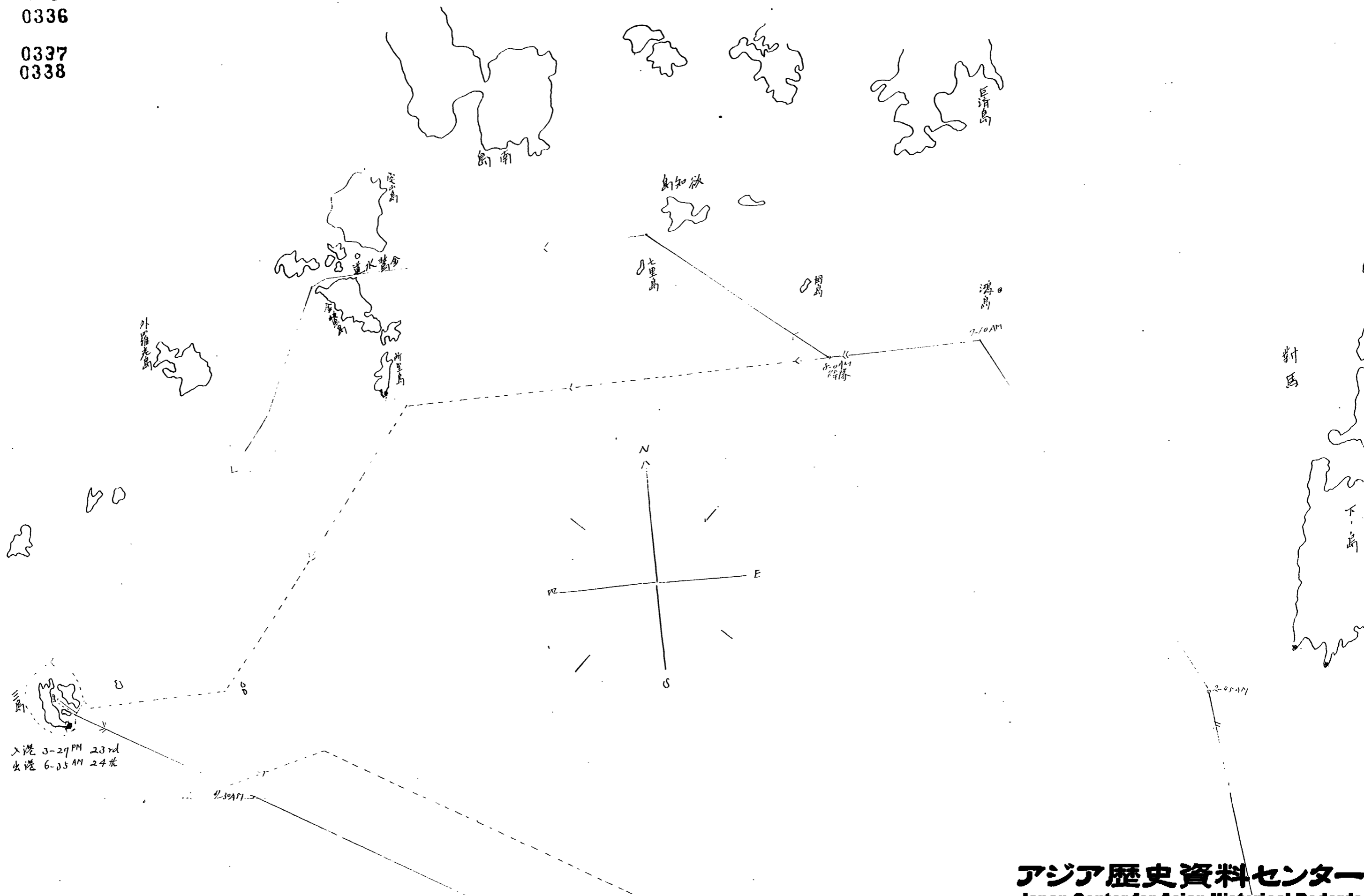
0333

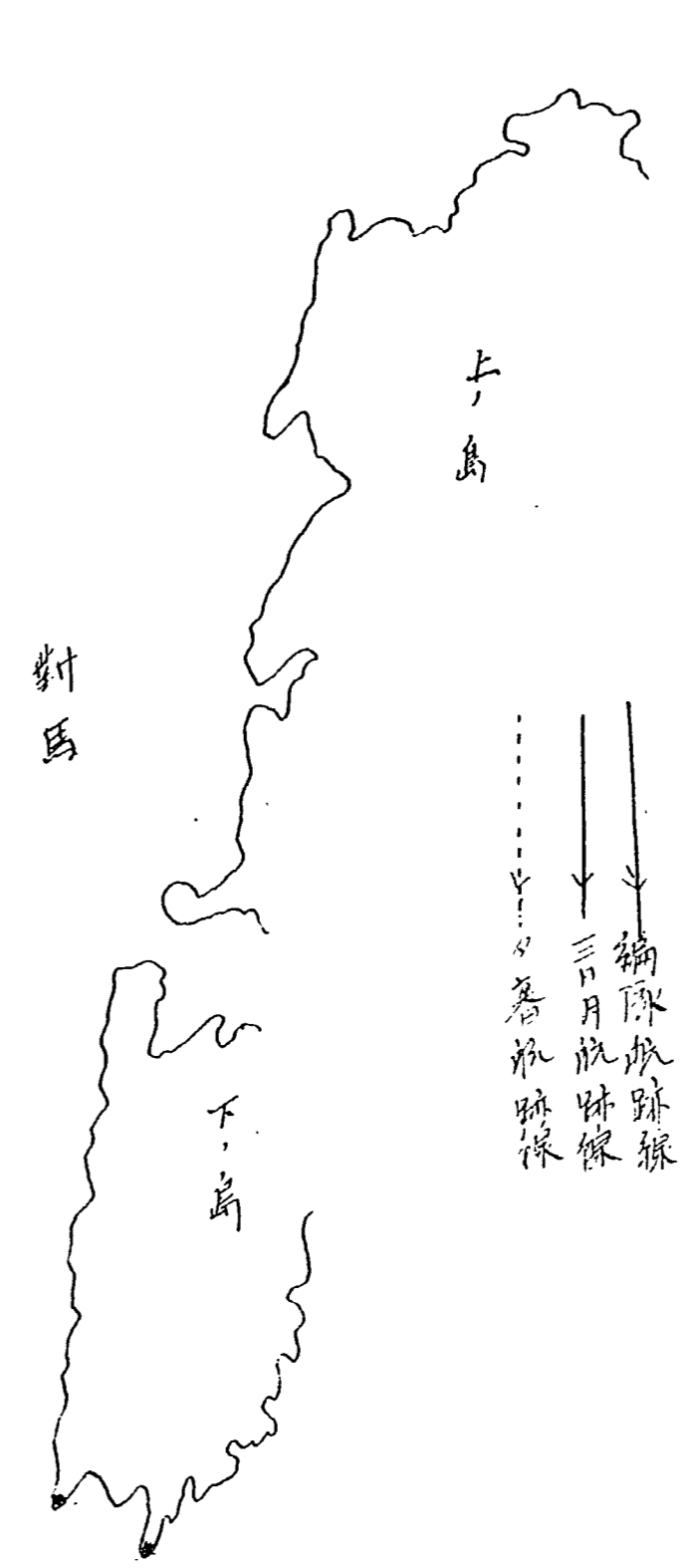
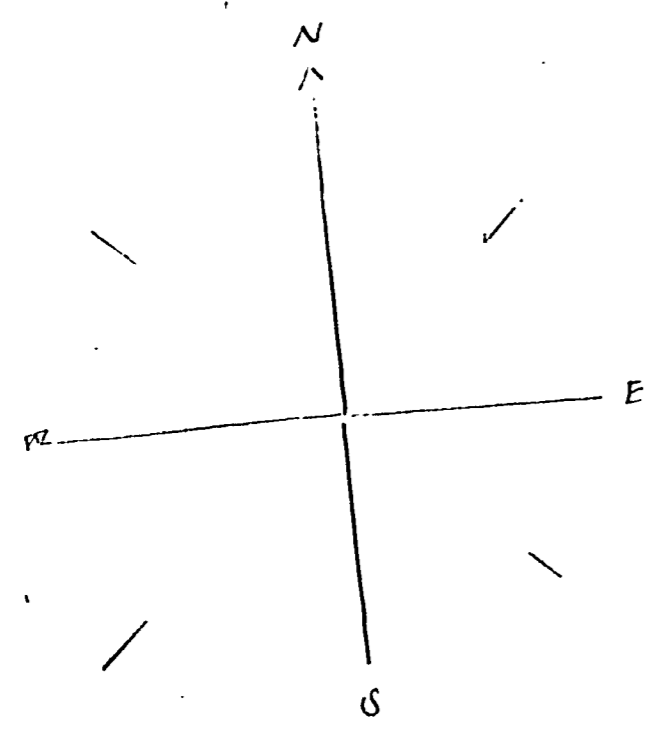
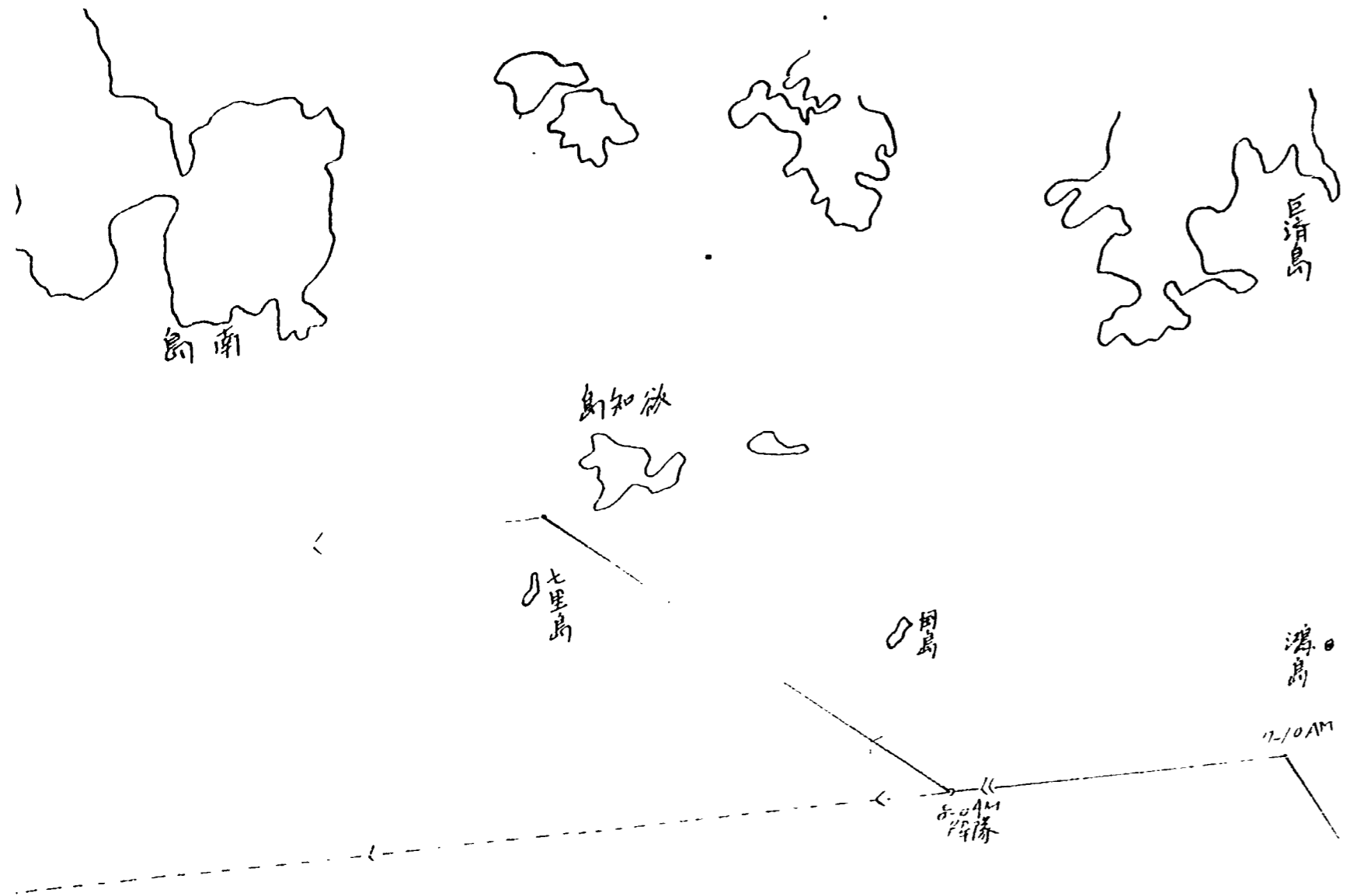
内稱礮八百餘万圓ナリ而ルレオシシス島
 ハ珊瑚島多ク成リ占来海島群ヲ是
 島多ク堆積シテ是等島及標分ク有
 スル礮下礮多ク有リ而レトモ一而
 其島ノ位置不定ナルトモ又一種ノ幽
 靈島トモナリ而レトモ國必貿易ノ運
 ヲ重ク見テ十年必此趨勢ニ容易ニ概
 後ノ期ニ達セタルヲ愛フモ年アリス
 此大洋中前陳ノ如キ一大宝庫アリト
 セハ之ヲ疑向ニ附シ之ヲ遠キニ思フ

分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

0335
 0336
 0337
 0338

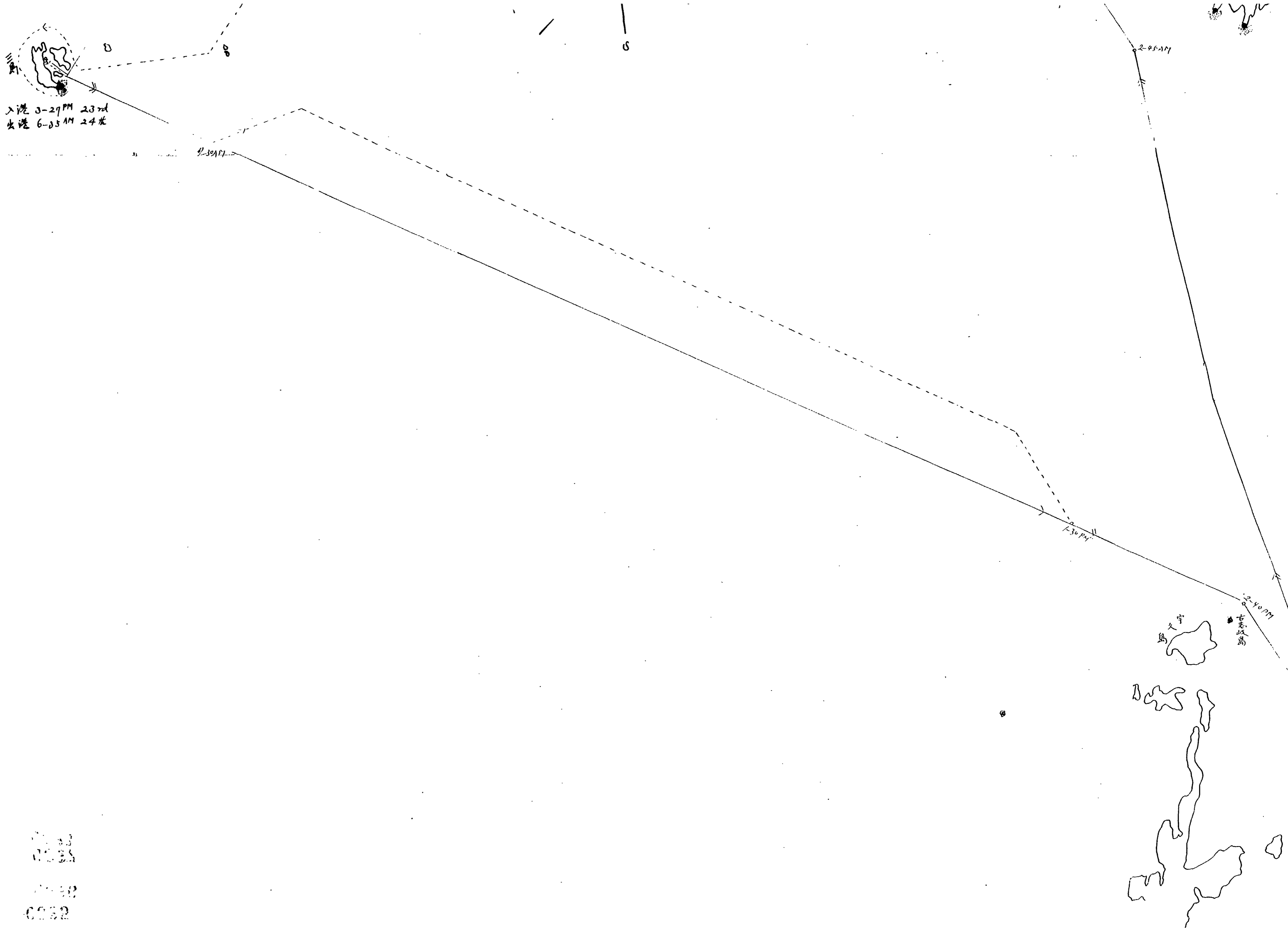




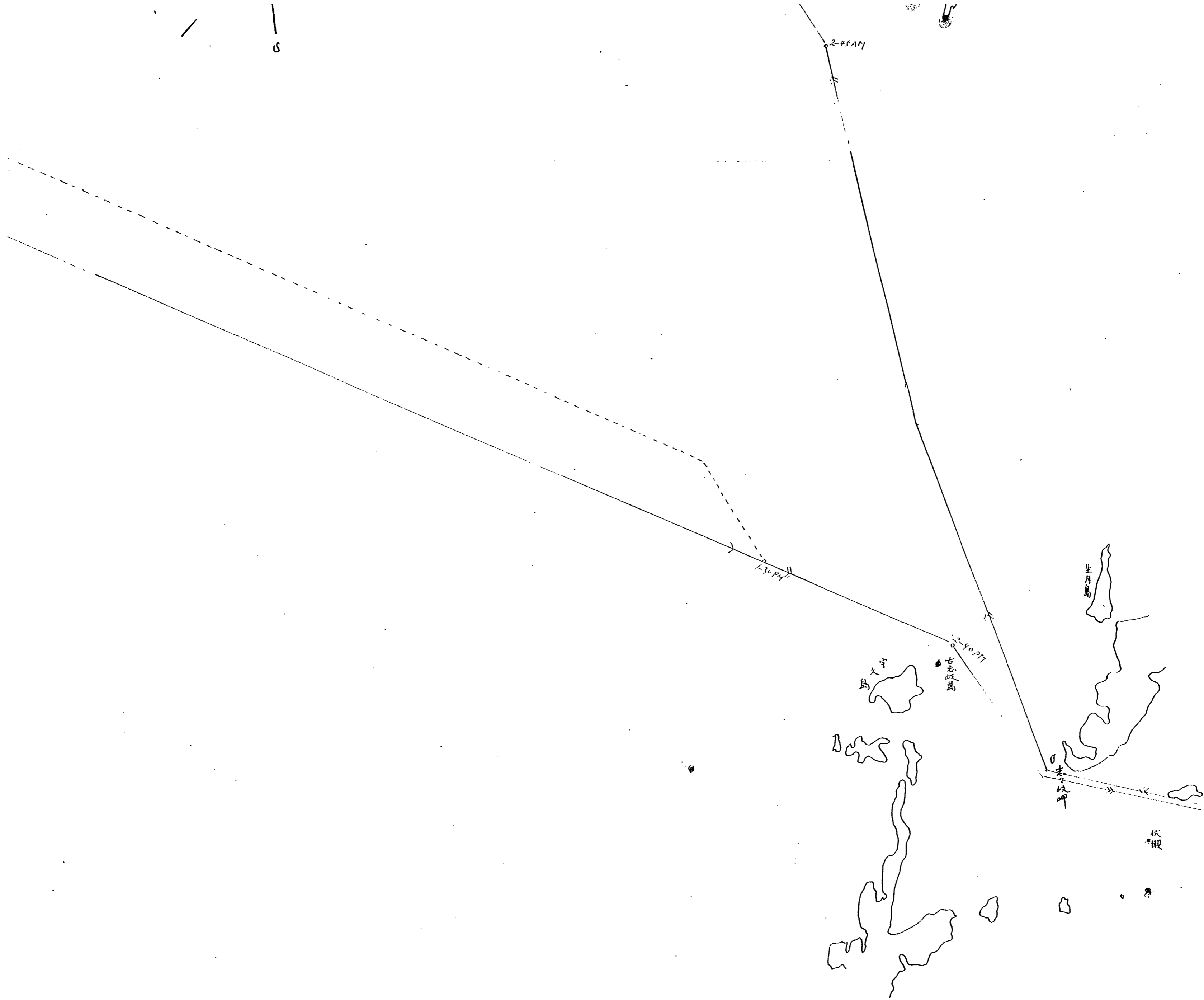
失踪汽船捜索行動略圖



入港 3-27 PM 23rd
出港 6-03 AM 24th



1031
1031
1031
1031



佐世保
 出港 6-0PM 22nd
 入港 5-35PM 24th

剛家、為ノ不利ナルヲ思ヒ、遂ニ三島ヲ出シ、同
家、士相同ク探陸セリトシテ、其同入リ
出航セシ所以ナリ

右様、次牙ニシテ、糸澤丸、船長信
孫定、埃、通信ヲナシ、其外、其
所、島、昔トシテ、其之、一、片、何、年、特、別、ノ、注、意
深、リ、以、テ、中、校、密、査、系、下、分、此、般、考、査、
願、キ、也

大正三年二月九日

大

東武市麻布区新堀町壹丁目四十二番

平尾幸右郎



海軍大臣野澤齋藤實殿

拾行 (丸吉商店印刷)

0340

松井淳平殿

紀洋丸船長

柳本嘉八郎(印)

拝啓

本船南米より歸航ノ途次去ル十二月二十八日午後三時十二分東經百五十四度十六分北緯三十度四分ガシチス島ヲ距ル西南約三十哩ノ地點ニ於テ帆船吉岡丸ト遭遇シ信號ヲ交換シ矣此船員一同無事ナル旨船主へ通信アリメントノ依托相受申候ニ付右御傳達申上候

當日天候甚ダ險惡ニシテ風浪高ク為メニ充分接

近スルヲ得ズ辛ジテ以上ノ信邪ヲ交換シ得候ノ
ミニテ其他ノ情報ヲ得ザリシ事甚ダ遺憾ノ至
リニ御座候

先ハ右御通知迄如斯御座候

敬具

大正三年一月一日

無人島探検

寫真帖

新聞記事抜萃

●報知新聞 (大正二年十一月十六日)

◎壯なる哉吉岡丸

十五日愈々無人島
探検の首途に上る

太平洋上の一孤島にして數十年來疑問に置かれし中の鳥島(カンジス島)は本紙に再三報道したるが如く今回大阪市北區會根崎町中二丁目平尾幸太郎、麻布區森元町一丁目松井淳平兩氏の手依つて探検することとなり探検船たる帆船吉岡丸(百七十一噸)は船長白井兼藏、鑛主代理清水儀太郎、工夫長藤田森太郎、大平三次氏外水夫、漁夫、大工、潛水夫等十九名を乗せ愈々十五日午後二時鐵砲洲地先を解纜し茫漠たる太平洋上一千哩の大航海の首途に上れり

▲万歳を三唱す 同船は最初本月五日出帆の豫定なりしも諸般の準備に手間取りし爲め延期しむるものにて十五日は恰も出船の吉日に當れり此日の見送人は肝付男、松木男、志賀重昂氏並に新聞記者南極探検隊員及び乗員の家族等二百餘名にして新橋の阿嬌數名も亦た來りて大に行を壯ならしむ一同は船松町の事務所及び鈴村旅館に休憩して時刻の來るを待ち定刻吉岡丸に移りたるが船中平尾氏の挨拶、志賀、肝付兩氏の訓戒、大平氏の答辭あり松木男の音頭にて萬歳を三唱し終つて見送人一同二艘の舳舟に乗り紅白の幕を張れる中に祝盃を擧げ劉曉たる奏樂中を二艘の小蒸汽に曳かれて品川沖迄見送らんとす吉岡丸にては白井船長以下孰も凜乎たる決心の色を面上に湛へ元氣頗る昂るを見ぬ

▲さらば吉岡丸 船は静かに河口に向つて進行すれば兩岸群集堵を築きて此壯舉を賛す見よ吉岡丸の檣頭高く翻れる萬國信號旗を、築地を後に濱御殿、芝離宮を右手に眺め第三、第二、第一の海堡を過ぎて品川沖に到る時暮色漸く海面を蔽ひ凄壯の氣轟々と身に迫るものあり、萬歳の聲樂の音と相和して茫漠たる海上を走る快、又快、纏て勇壯なる小蒸汽船の曳綱は解かれ吉岡丸は、帆走を初めたり百七十噸の小帆船は數萬噸の鐵櫃に似て堂々と海を壓し「行け! 行け! 南へ!!」と感極つて幾度か舷を叩くものあり、見送人は一齊に舳舟の上に起立して最後の訣別を爲し帽子を振り手巾を振り聲を絞つて萬歳を叫び乗員は船室の上に立ちて之に答ふさらば!さらば!吉岡丸!!

●時事新報 (大正二年十一月十六日)

◎五億圓の寶庫

其鍵を握らん爲め
探検船南洋に行く

北緯三十度東經百五十四度二分の地點に於て英國の海圖には千八百年頃よりガンジス島として我が海軍の海圖には本年六月より中ノ鳥島として周圍二里餘の一小島嶼記しあるも何れも所在不明の記號記入しあり未だ何人も其所在を知る者なきより一種の幽靈島として一般に疑問に附せられ居るが同島は珊瑚層よりなりたる者にて同島全部は磷礦土よりなり信天翁、黑燕、其他の鳥類無數に棲息し海には鯨、鱈、鰯等の魚類ありて其磷礦は三十二乃至六十七パーセントの量を含み五億圓以上を保有する寶庫なりとの事傳はり居れるも誰一人其所在を發見したる者もなかりしが明治四十四年頃小笠原の一島民が北緯三十度東經百五十四度の邊にて一無人島に漂着したるが右は多分ガンジス島即ち中ノ鳥島ならんとて山田貞三郎内田某等の諸氏磷礦試掘の願ひを出したる儘何等の經營をなさずして試掘の期限は徒に経過したるより平尾幸太郎、松井淳平の諸氏天與の寶庫を棄て置くは國家の損害なりとし其寶庫を開發せんとして其試掘の許可を得其島の所在を確むる爲め今回一艘の探検船を發航せしむる事に決したり

▲探検船の出帆 同探検船は百七十一噸の帆船吉岡丸にて船長は甲種一等運轉士白井兼藏氏、鑛主代理清水儀太郎氏及びブラジルにて鑛業に従事したる大平三次氏(六十七)外二十餘名にて既報の如く十五日午後二時東京灣を出帆したるが出帆に先立ち先づ鑛主は船員其他に一場の訣別の挨拶をなし次いで志賀重昂、肝付兼行男の訓諭あり肝付男の發聲にて吉岡丸船員の萬歳を唱へ波靜かなる東京灣を小蒸汽に曳かれ二艘の傳馬には見送り人を満載して勇しく出帆したるが臺場沖にて船は南へ南へと進み行きたり

▲歸朝は本年末か 同中ノ鳥島は房州野島崎燈臺を距る七百八十哩小笠原島を距る百六十哩の處に在り三哩の速力を以て進航せば十二三日を以て達すべきも同島は前記の如く其所在不明なれば其所在を確むるまでには猶數日を要すべき故同島を發見し磷礦を試掘して歸港するまでには一ヶ月半、本年の末か來年の始頃には寶庫の鍵を持ち來り得べきかと云ふ

0344

◎ 南へ南へ我寶島へ

無人島探検船發す

浩濤一千哩太平洋の真只中ガングス群島の一にして無盡の寶庫を藏せる無人島を探検すべく本月七日以來設備中なりし帆船吉岡丸(百七十一噸)は其設備全く完了せるを以て十五日午後三時愈鐵砲洲に纜を解き搖々たる寒波を蹴りつゝ帆船遙かに南に向つて没し去りたり是より先此の壯舉を遂行せんが爲め遠洋航海に堪え得べき萬般の設備を爲し船員の如きも總て遠洋航海に經驗ある壯者のみを選び船長白井兼藏工夫長藤田森太郎以下廿名の外監督として元陸軍大佐大平三治氏乗込み當日は朝來滿船飾を施し午後一時頃までに糧食飲料水測量器具娛樂具等の積込みを了したり同船の前途を祝福せん爲め船主其他の關係者の來訪極めて多かりしが船長代理菊池二等運轉手は「今回選抜された船員は何れも南洋航海等に經驗あるものゝみて元の船員で残つた者は僅に三名に過ぎぬ航海日數は往復四ヶ月の豫定で先づ小笠原の父島に向ひ更に無人島に向ふ筈である直航距離は一千哩であるが帆船の事であれば風次第で何千哩になるかも知れぬ併し充分な設備を施してあるから途中ドーナ時化に遇ふても先大丈夫で船長以下必ず成功を盟つて居る」と立てば頭を打つ如うな低い船室の卓を叩いて元氣よく語り斯くて午後二時過ぎ全く出帆準備を終ると志賀重昂氏が船員一同に對して一場の訓話を試み船主其他は何れも無事なる航海を祈り萬歳聲裡に北風に弓の如く帆を孕ませて勇ましく發程の途に就きたり

● 東京朝日新聞(大正二年十一月十四日)

◎ 無人島の開拓及び移住の方法

▽ 志賀重昂氏談

東京を南に距る一千哩の海上にて新に發見せられたる無人島ガングス島の探検並に遺利開發の目的を以て近く東京灣を出帆す可き吉岡丸乗員の爲に志賀重昂氏は左の如く語れり

▲ガ島は推理上正に珊瑚島なる可きを以て上陸に際しては其裂目を捜せし上波濤の上下状態に注意し極めて小心又最も大膽なる飛躍により島上の足止め場に上陸せざるべからず又二週間の航海中最も注意を要す可きは壞血病にして該病症を豫防せんが爲には出帆に際し出來得る丈の野菜を貯藏せざる可らず而して

▲長期の貯藏に堪へ得可き野菜は南瓜、玉葱、馬鈴薯、西洋南瓜等なるが壞血病豫防の爲最も有効なるは薤漬なりとす、目的地上陸後に於ても島上には直に食し得可き野菜存在せざる可きを以て枸橼酸、葡萄酒、サイム液を携帶し之を水に入れ置き一日一回宛飲用せば先づ以て壞血病に襲はるゝが如き事無し

▲上陸せし後は皮膚を常に清潔に保つ事が第一の要件にして斯の如き島には泉無きを以て身體及び着衣を洗滌する爲に地上の凹所を探し井戸を掘るべし其水質は勿論善良ならずと雖も入浴洗濯等には事缺かざる可し又飲料水としては豫め幅廣き白木綿を携帶し其中央に細長き袋を穿ち四邊に紐を附して

▲樹枝に結び置 かつ夏期には毎日一回の驟雨あり秋冬の時節と雖も二日毎に一回づゝの降雨は必ずある可きを以て右の袋に之を受け其下に桶を備て蓄水するを以て事足れりとす只此際注意す可き事は水の容器に常に蓋をなす子子の發生せざる様ならず可き事なり炊事其他に用ふる薪は其種類二三種に過ぎざる可く尙草も十科以下なる可きも草木の兩つ乍ら

▲常に繁茂して居る 可きを以て燃料に不足を告ぐるが如き事あらざる可く又斯の島は高さ三十乃至四十尺を平均とするも最高は五十尺以上に達す可きを以て斯かる地點の木陰を選びて住宅を建設し不時の海嘯及び風濤の災害を豫防するを可とす、食物は鳥類にては大は信天翁より小は黒燕に至る迄其種類多く魚類にては

▲鮫鯉等頗る豊富 なるを以て食するに任す可しと雖も専ら魚鳥の肉のみを食する時は其結果遂に壞血病の襲ふ處となり生命を失ふに至るを以て此點は最も注意せざる可からず、即ち魚鳥と併食するに常に野菜を以てし野菜缺乏の際には草木の柔かさ若葉を海水にて茹て若しくは海藻を混じて食するをよしとす、探検船吉岡丸が無事同島に到着の上は願はくは如上の

▲諸設備を實施し て永住の謀を立て同島の富源に關しては巨萬の磷礦を藏すとも傳へられ其遺利の開發及び實際的に帝國の新領土を加ふる事は海洋開拓上より見るも實に邦家の一大慶事なれば探検に際しては蕃杏、大根、瓜類、甘藷、トマト等の種子を携帶し遠大の抱負を以て此事業を遂行せられん事を希望せざるを得ず



主 鑑
君 平 淳 井 松



主 鑑
君 郎 太 幸

アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp/>



吉岡九船長及船主代理以下乗組員一員



無人島探検船吉岡丸(百七十一噸)

供覽

軍務局

運 送

大正三年二月十八日午前十一時十五分 海軍省局著

發信者 大湊要港部司令官

受信者 海軍大臣

電報譯

本月十四日夜北海道小樽港ヲ發シ石炭三百噸ヲ積ミ函館ニ航行ノ途
 小樽西方約六哩餘沖ニテ孰賀丸ト衝突沈没ノ疑アル汽船天晴丸
 (噸數四六〇餘)ノ搜索ニ関シ船主ヨリ店員ヲ派シ昨夕願出テシモ
 目下鐵洋ノ航海ニ堪フル艦船一隻モ無之ヲ以テ其ノ要求ヲ斷リ
 夕リ
 右御届ス

終

0349